

イマジン・アンダーグラウンド ～キューガーデンその2～ 延原尊美



写真1 小さな空き地に横たわる大木ベンチ
(白矢印の先に写真2の説明板)

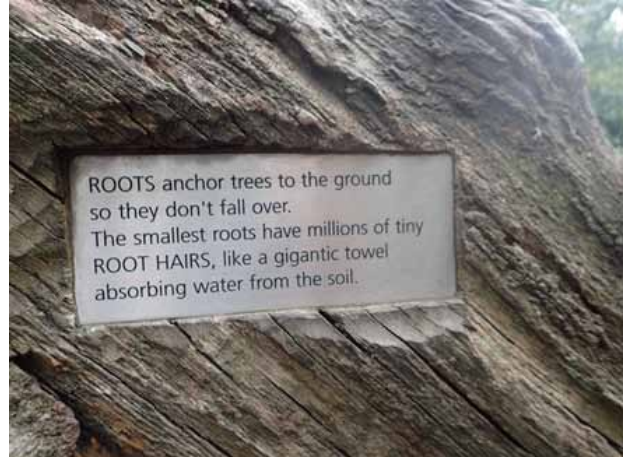


写真2 根っこにはめ込まれた小さな説明文

ロンドン郊外の植物園キューガーデンの目玉の一つ、高さ 18m の森林樹冠部にわたされた回廊 (Xstrata Treetop Walkway) については前回紹介しました。実はこの森林回廊の根っこの部分には、Rhizotron (古代ギリシア語で rizo は根という意味) と呼ばれる半地下の施設があります。地上からそびえ立つ壮大な樹冠回廊にどうしても目が行きがちなのですが、それと同じ、いやそれ以上のスケールの世界が地下には広がっていることが示されています。

Rhizotron の展示ではアートを用いて、樹木の根が作り出す地下の生態系が表現されています。80% 以上の樹木は根っこの先で菌類と共生していて、それらの菌類は樹木から糖類を得るかわりに、樹木が根から水分や栄養分を吸収するのを助けたり、病気にかかるのを防いだりしています。キューガーデンの微生物学者は、このような地下と地上をつなぐ生物の共生関係の研究も行っています。地下の生態系は私たちにとっては目に見えない、イメージしがたい世界かも知れませんが、私たちの生きる地上世界を支える大切な役割を果たしていると言えます。木から大地に降りて進化してきた人類ですが、これからはその根元に広がる地下世界と、どのように共生してゆくのか、学んで行かなくてはならないと思います。

さて、Rhizotron を出て植物園内の森を散策していると写真1のような光景に出会いました。小さな空き地に倒れた大木がそのまま保存されていて、大木の根っこの広がりその真下から観察することができます。よく見ると根っこの部分に写真2のようなプレートが埋め込まれています。「大きな根は大地にあるしたイカリのように巨木を支え、小さな根に生える数百万もの根毛は巨大なタオルのように大地から水を吸収する。」シンプルなメッセージは一編の詩のように、この巨木の作り出す地下世界とのやりとりを表現しています。

倒木の幹の中央は、ちょうど親子が腰掛けられるよう少しだけ彫り込まれています。広い園内でもここだけ、この一本だけ、このようにしつらえてあるようです。いったい、この木はいつごろからガーデンで育ち、大木に成長するまでどれくらいの歳月を要し、またどうして倒れてしまったのか、またこのようなメッセージをもったモニュメントとしても生き続けるに至るきっかけはなんだったのだろうか、一つの物語を感じさせる空間でもありました。みなさんもキューガーデンを訪れる機会があれば、大木に腰掛けて少しだけ地下世界を想像してみてください。自分が腰かける場所にどれだけの命のつながりがあるのか、地下世界にも想像をはせながら。